

# 木村九蔵の業績

日本初の蚕種貯蔵庫建設



蚕種貯蔵庫外観



蚕種予備保護室

蚕種貯蔵庫は本庄町の吉田清英邸の一角に建設された。清英は埼玉県初代県知事で、知事時代、特に埼玉県の殖産工業に力を入れ、蚕糸業への理解は極めて高かった。退職後、本庄町に邸宅を構えていた。

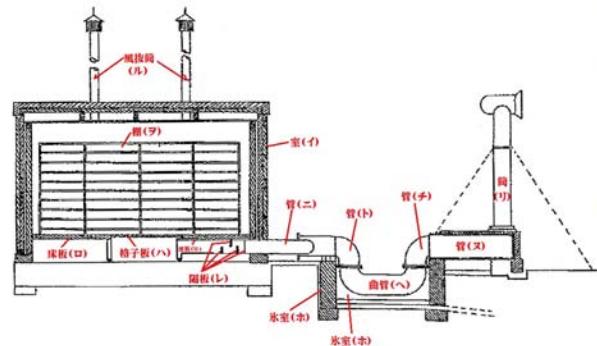
(参考 大正5年「児玉郡蚕種業史」)

木村九蔵の遺した業績の一つに我が国最初の蚕種貯蔵庫の建設がある。明治22年(1889)10月、ヨーロッパの蚕糸業視察から帰国した九蔵が、視察で得た教訓の一つに、蚕種保護の問題があった。ヨーロッパの蚕糸業者は蚕種の保護に力を入れていたのに対し、国内ではこれまで蚕種保護について何ら対策を行っていなかった。九蔵は蚕種業の原点は蚕種にあると考え、本格的な蚕種保護対策を計画したのである。帰国後、早速埼玉県知事吉田清英に面会し蚕種保護の是非、九蔵の発案等について相談すると、県知事から援助は惜しまないので至急着手するようにと励まされた。九蔵は勇躍、蚕種貯蔵庫建設に向けて動き出した。日本蚕種貯蔵会社を設立し、初代社長に就任、事務所・蚕種貯蔵庫・蚕種予備保護室等を建設した。貯蔵庫自体は既に構想を持って調査研究を進めて立案しており、設計を工学博士辰野金吾に依頼した。明治25年(1892)1月には特許を取得している。

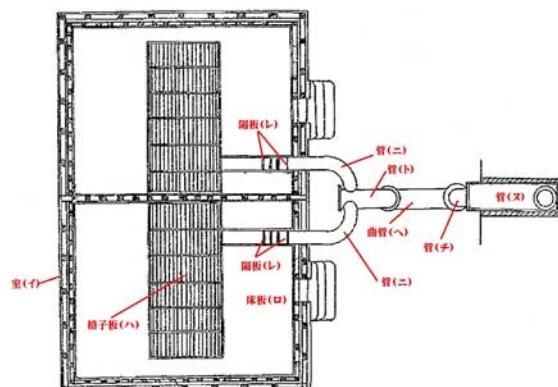
蚕種貯蔵庫の構造については外観写真と特許記録(特許1442号)が残されているので平面図をここに示した。平屋で寄棟桟瓦葺き、壁面は四周を漆喰で固め、密封性の高い構造である。壁は二重構造で、不導熱体で造り、床は格子床で、外部の氷室内を通る管を室内に引き入れ、格子床から冷気を室内に取り込み、室内の棚に蚕種を保存する。屋根には数本の風抜筒を設け、先端に風車を付けて風力で室内の空気を排出する仕組みであった。

貯蔵庫は現在の本庄市役所の西側、市街地北端の台地上に、明治24年(1891)1月に起工し、年内に竣工した。翌25年より事業を開始し、開始当初はその機能について疑問視する声もあったが、次第にその機能が充実したものであることが知れ渡り、全国から注目されるようになった。保存依頼者が増加し、比較的高価な保存料であったが、常に貯蔵庫は満杯の状況であったという。その後、新しい冷蔵庫が出現したことで役割も終わり、日本蚕種貯蔵株式会社は大正10年(1921)に解散した。日本最初の蚕種貯蔵庫の登場は、まさに画期的出来事であった。東北地方や信州・上州山奥など自然地形を利用した風穴での蚕種保存に頼った日本の蚕種保護体制下にあって、平地の養蚕地帯近辺で安全に保存できる貯蔵庫を造るという画期的な施設であった。木村九蔵は日本で最初にそれを実現したのである。

## 蚕種貯蔵庫の仕組



側面図



平面図

